

大江戸-東京／都市街区幾何形状の歴史的進化に関する実証的研究
－ 徳川期・寛文年間から令和に至る 350 年の街区変遷から
読み取る災害インパクト －

代表 谷本 潤（九州大学大学院総合理工学研究院 教授）

『旗本三嶋政養日記』に取り上げられている本所石原片町通辻にあった拝領上屋敷およびその街区に注目する。明暦の大火後に開発が始まった本所地区が中・下級旗本の武家町として本格的に整備されはじめた江戸期中期に遡及するとともに、明治維新以降、令和の現代に至るまでにこの街区の辿った変遷推移を、各種の住宅地図、江戸切り絵図等の史料を参看しながら明らかにした。関東大震災後の震災復興として行われた土地区画整備事業によりもたらされた、新たな基盤街路の導入が、当該街区を南北に分断することになったものの、街区形状そのものは大きくは変化しなかったことに着目し、街区内の分筆数で決まる一住居当たりの敷地面積を時代ごとに比較考察した。一住戸当たりの敷地面積は都市環境学では、見付け面積率と並んで都市の流れ場、ひいては防災上の観点からも重要な基礎的都市幾何情報である。諸史料の不足により、明治期半ば以降、関東大震災までの推移は確言できない不分明さが残るが、震災前後で、すなわち区画整理事業を画期として、それ以前の旗本屋敷の風情を残す比較的豊かな住宅地が、それ以降には、小住宅が高密に存在する典型的江東下町の街区構成へと急激に変容したことが明らかになった。この大震災ひいては震災復興区画整理事業がトリガーとなった街並み変容は、明治維新による大きな社会変動や空襲による被災がもたらした変化より、はるかに大きいとの稍意外の感を抱く史実が炙り出された。